

<http://www.ses-japan.org/>

2021 年 SES-J 第 33 回大会プログラム

日時: 2021 年 8 月 14 日(土) 10 時 00 分～17 時 10 分

場所: オンライン開催 (Zoom ミーティング形式)

参加 URL:

<https://zoom.us/j/3044907988>

ミーティング ID: 304 490 7988

SES-J the 33rd Conference in 2021

Date & Time: August 14 (Sat), 2021. 10:00 - 17:10

Venue: Online (Zoom Meeting)

総会 General Meeting (16:20 – 17:00)

- * 会員でなくてもご参加自由です。(資料代 500 円)
- * 大会及び総会資料となっていますので本紙とジャーナル(2021)を 必ずお持ちください。

問い合わせ先: dsugai@g.matsuyama-u.ac.jp (菅井)

SES-J 第 33 回大会開催について(ご挨拶)

この度は、エコリテシズム研究学会 (SES-J) 第 33 回大会を、Zoom によるオンラインでの開催をさせていただくことになりました。依然として、コロナ禍という非日常が続いておりますが、

多くの皆様のご参会をお待ちしております。

例年のように、プログラムは非常に充実した内容になっており、研究発表では、それぞれ アラスカとクリスマス島をフィールドとした学際的研究を、ワークショップでは海とメディア研究についての最新の論考 *Wild Blue Media: Thinking through Seawater* (2020) を基に 発表していただきます。シンポジウムでは、『トランスパシフィック・エコクリティシズム』再考」と題して、2019 年に彩流社より出版された共著論文集の執筆者の方々が、その新たな展開を取り上げてテーマの今後の可能性について論じていただきます。そして 講演は日本ソロー学会前会長で九州大学教授の高橋勤先生をお招きし、「自然保護という思想——ソローからジョン・ミューアへ」というタイトルで、先生の長年にわたる研究の一端をお話ししていただきます。先生にはご多忙の中、二年越しで今回のご講演が実現しました。

今回のオンラインでの大会が成功裏に終わるため、また今後の学会運営におきましても、皆さまのご協力のほど、どうぞよろしくご支援のほどお願い申し上げます。皆さまと Zoom にてお目にかかれるのをお待ちしております。

会長・塩田 弘

場所:オンライン開催(Zoom ミーティング形式)

プログラム

総合司会 三重野 佳子(別府大学)

10 時 00 分 開会の辞 塩田 弘(SES-J 会長)

10 時 10 分～11 時 10
分

ワークショップ

「Blue Humanities——*Wild Blue Media*(2020)を読む」

司会・担当:菅井 大地(松山大学)

担 当:浅井 千晶(千里金蘭大学)、伊藤 詔子(広島大学) 11 時 10 分

～11 時 20 分 <10 分休憩>

研究発表

11 時 20 分～12 時 30 分(発表 25 分 質疑 10 分)

1. 林 千恵子(京都工芸繊維大学)11 時 20 分～11 時 55 分

「先住民族の地名研究は何をもたらすのか——Thomas Thornton のプロジェクトがアラスカ南東部社会に与えた影響」

司会: 深井 美智子(神戸女子大学)

2. 小杉 世(大阪大学)11 時 55 分～12 時 30 分

「クリスマス島の英米核実験と除染をめぐる——キリバス民間人の視点から」司会: 松永 京子(広島大学)

12 時 30 分～13 時 00 分 <昼食休憩>

ム

13 時 00 分～15 時 00
分

シンポジア

「『トランスパシフィック・エコクリティシズム』再考」

司会:一谷 智子(西南学院大学)

講師:牧野 理英(日本大学)

「災害とローカル・ナラティブ——ジュリエット・コーノ『ツナミの年』における 海の表象」

講師: 一谷 智子

「核被害と気候変動のはざまで——キャシー・ジェットニル＝キジナーのトランスパシフィックな詩学」

2

講師: 湊 圭史 (松山大学)

「オセアニアとSF——Greg Egan のポストアポカリプス小説における非人間的世界観」

討論者: 芳賀 浩一 (城西国際大学)

15 時 00 分～15 時 10 分 <10 分休憩>

演

15 時 10 分～16 時
20 分

特別講

講師: 高橋 勤 氏 (九州大学)

「自然保護という思想——ソローからジョン・ミューアへ」司会: 大島 由起子 (福岡大学)

会

16 時 20 分～17
時 00 分

総

17 時 05 分 閉会の辞 松永 京子 (SES-J 副会長)

~~~~~  
~ SES-Japan

## The 33rd Ecocriticism Studies Conference (2021)

Date & Time: August 14 (Sat), 2021. 10:00 - 17:10

Venue: Online (Zoom meeting)

~~~~~P R O G R A M ~~~~~

MC: Yoshiko MIENO (Beppu University)

10:00 Opening Words: Hiroshi SHIOTA (SES-J President, Hiroshima Shudo University)

Worksh
op

(10:10 -
11:10)

Title: Blue Humanities: Reading Wild Blue Media (2020)

Chair/Speaker: Daichi SUGAI (Matsuyama University)

Speakers: Chiaki ASAI (Senri Kinran University); Shoko ITOH (Hiroshima University)



Break (11:10-11:20)



Presentations (11:20 - 12:30)

1. Chieko HAYASHI (Kyoto Institute of Technology)

Chair: Michiko FUKAI (Kobe Women's University)

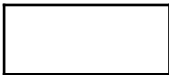
“What Native Place Name Studies Bring Forth: The Social Impact of Thomas Thornton's Project in Southeast Alaska”

2. Sei KOSUGI (Osaka University)

Chair: Kyoko MATSUNAGA (Hiroshima University)

3

“Narratives of I-Kiribati Civilian Residents in Kirimati about the UK and USA Nuclear Tests and Decontamination”



Lunch Time (12:30 - 13:00)



Symposium (13:00 - 15:00)

Title: “Revisiting Transpacific Ecocriticism”

Chair: Tomoko ICHITANI (Seinan Gakuin University)

Panelist: Rie MAKINO (Nihon University)

“Disaster and the Local Narrative: The Representation of the Sea in Juliet Kono's Tsunami Years (1995)”

Panelist: Tomoko ICHITANI

“Between Nuclear Catastrophe and Climate Emergency: The Poetics of Kathy Jetrūl-Kijiner's Iep Jāltok and Other Works”

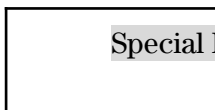
Panelist: Keiji MINATO (Matsuyama University)

“Oceania and Speculative Fiction: Nonhumanistic Worldviews in Greg Egan's Post-apocalyptic Novels”

Discussant: Koichi HAGA (Josai International University)

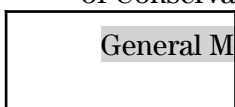


Break (15:00-15:10)



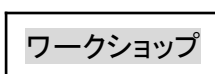
Chair: Yukiko OSHIMA (Fukuoka University)

Lecturer: Tsutomu TAKAHASHI (Kyushu University) “The Idea
of Conservation: From Thoreau to John Muir”



17:05 Closing Words: Kyoko MATSUNAGA (SES-J Vice President)

発表要旨



10 時 10 分～11 時
10 分

「Blue Humanities——*Wild Blue Media* (2020)を読む」

司会・担当 菅井 大地(松山大学)

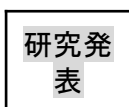
担当 浅井 千晶(千里金蘭大学)

担当 伊藤 詔子(広島大学)

本ワークショップでは、Melody Jue, *Wild Blue Media: Thinking through Seawater* (Duke UP, 2020)をとりあげる。本書は、Ocean Humanities や Blue Humanities といった海洋をめぐる環境人文学の研究書である。著者は、海に潜るという経験を手掛かりに、主体の置かれている環境がいかに主体の思考に影響を与えているかを考察し、特に、環境固有の分析(Milieu-specific analysis)を実践することを通して、interface、inscription、database というメディア論のキーワードを再検討する。当日は、Chapter 1、2、3 を主に検討し、

4

海洋をめぐるメディア研究と文学研究の接続を考えてみたい。



11 時 20 分～12
時 30 分

1. 「先住民族の地名研究は何をもたらすのか——Thomas Thornton のプロジェクトがア

ラスカ南東部社会に与えた影響」

林 千恵子(京都工芸繊維大学)

近年、カナダや米国アラスカ州では、ヨーロッパ由来の地名を先住民族の地名へと変更する動きが盛んであるが、この動きの一因となったのが地名研究である。本発表では、アラスカ南東部先住民 Tlingit の伝統的地名 3000 以上を掘り起こし、地名の歴史的、文化的意味に加えて、Tlingit 独特の環境観を地名から鮮やかに解明した Thomas Thornton の研究をもとに、地名研究の重要性と可能性を明らかにする。

2.「クリスマス島の英米核実験と除染をめぐって——キリバス民間人の視点から」小杉 世 (大阪大学)

太平洋地域で行われた冷戦期の核実験のなかでも、現在のキリバス共和国にあたるライン諸島クリスマス島とモルデン島で行われた英米核実験については、従軍したイギリス兵、ニュージーランド兵、フィジー兵の体験談を除いて、ごく最近まで調査がなされることがなかった。核兵器禁止条約へのキリバス共和国の批准は、核被害国側の主張を発信するために重要な意味をもつと思われる。本発表では、2016～2019 年にクリスマス島で行ったインタビュー調査をもとに当時を記憶するキリバス民間人の視点から核実験と除染について検証し、帝国の核軍事活動が島民の生活に及ぼす影響について考察する。

シンポジウム

13 時 00 分～15 時
00 分

「『トランスパシフィック・エコクリティシズム』再考」

司会 一谷 智子(西南学院大学)

本シンポジウムは、SES-J 会員が中心となり、環太平洋地域を中心に展開する環境をめぐる文学と文化についての国際的論集として刊行された『トランスパシフィック・エコクリティシズム—物語る海、響き合う言葉』(2019)をふりかえる試みである。本企画では、討論者に芳賀浩一氏を迎え、共著に参加した三名の論者が、本書で展開された議論を発展的に論じることで、人間的・非人間的現象の流動性への意識を喚起し、特定の地域や文化を超えて思考するトランスパシフィック・エコクリティシズムの可能性と課題について再考する。

「災害とローカル・ナラティブ——ジュリエット・コーノ『ツナミの年』における海の表象」

講師 牧野 理英(日本大学)

ハワイの日系アメリカ作家ジュリエット・コーノは詩集『ツナミの年』(Tsunami Years, 1995)において、家族の死と自然災害との暗喩的連関を描いている。その一見恨み言のように響く一人称は、自然の脅威を一辺倒に攻めるのではなく、グローバルな世界観を通して自身の日系性を逆照射させる。本発表では、本詩集の海の表象に焦点をあ

て、そのローカル・ナラティブに潜在するエスニック文学に対する抵抗的要素を考察する。

「核被害と気候変動のはざま——キャシー・ジェットニル＝キジナーのトランスパシフィッ

クナ詩学」

講師 一谷 智子(西南学院大学)

『トランスパシフィック・エコクリティシズム』が取り上げた環境テキストの中心的 主題に核問題と気候変動がある。本発表は、核実験による放射能汚染と気候変動による 二重の災害に晒されてきたマーシャル諸島の詩人 Kathy Jetñil-Kijiner の文学的実践に着 目する。詩集 *Iep Jāltok: Poems From A Marshallese Daughter* (2017)を中心に、地理的・歴 史的・文化的な太平洋の横断から生成する Jetñil-Kijiner の詩作を、ポストコロニアル・エコクリティシズムやエコ・フェミニズムといった視点を通して考察することで、その 詩学の一端を明らかにしたい。

「オセアニアと SF——Greg Egan のポストアポカリプス小説における非人間的世界観」 講師 湊 圭史(松山大学)

トランスパシフィックな視野でヒトと環境の関わりを考えることは、従来、人類中心 として語られてきた過去-現在-未来へのつながりを再考し、「人間」的枠組みからは み出していく事象や表現を掘りあげることであった。本発表では、オーストラリ アの SF 作家 Greg Egan の作品を参照し、この「ハード SF」作家の「人間」的枠組みを 越えた「ヒト」のあり方を徹底して問う試みを追うことにする。

討論者 芳賀 浩一(城西国際大学)

特別講
演

15 時 10 分～16
時 20 分

講師 高橋 勤 氏(九州大学)

「自然保護という思想——ソローからジョン・ミューアへ」

講演要旨

シエラ・クラブの創設者ジョン・ミューアがソローやエマソンを敬愛した事実はよく 知られている。1871 年カリフォルニアを訪ねたエマソンをミューアはヨセミテに案内 しており、またエマソンの死の翌年コンコードを訪問して墓参とともに、ウォールデン 湖畔に佇んでソローの理想に共鳴する。この講演では特に 1860 年代における自然保護 思想の形成と系譜をたどり、ソローからミューアへ受け継がれた思想的遺産について考 察する。

高橋先生主要著書(九州大学研究者情報より抜粋)

・『身体と情動——アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』(共編著、彩流社、2016)

6

・『ジョン・ブラウンの屍を越えて——南北戦争とその時代』(共編著、金星堂、2016)・

Ecoambiguity, Community, and Development(共著、Lexington Books、2014)・『アメリカン・ルネサンス——批評の新生』(共著、開文社、2013)・『環大西洋の想像力——越境するアメリ

カン・ルネッサンス文学』(編著、彩流社、2013)・『コンコード・エレミヤ—ソローの時代の
レトリック』(単著、金星堂、2012)・『＜移動＞のアメリカ文化学』(共著、ミネルヴァ書房、
2011)

＜他多数＞

発行日 2021 年 7 月 1 日

発行元 SES-J 事務局

〒790-8578 愛媛県松山市文京町 4 番地 2

松山大学経済学部 菅井大地研究室内

代表者 塩田 弘
